

中村町小学校

学びの基盤づくり推進校

1 研究の重点と具体的な取組

重点1：ねらいに迫る対話を生むための工夫

- ・単元のねらい、本時のねらいを明確にし、児童自身が見通しを持って、単元のゴールに向かって主体的に学べるように単元構成や課題を工夫した。
- ・思考の深まりが目で見えて分かるように、全文シートやホワイトボードなどの“ツール”を使って対話を促した。
- ・ペアやグループにおける対話、学級全体における対話など学習形態を工夫した。
- ・ゴールマークを活用し、授業の見通しを持てるようにした。

重点2：わかった！できた！を実感させる手立て

- ・自分でまとめを書けるように、キーマークを活用してキーワードや用語を確認した。
- ・ねらいや目的に合った変容をふり返りとして書かせた。
- ・終末に、学習した内容を活用する場を設定した。（適用問題、実技等）
- ・学習したことを、ペアやグループで伝え合った。

2 取組の検証

重点1：**教員**対話を意図的に設定することができた→前期：82.6% 後期：95.7%
児童友達と話し合っ、自分の考えが変わったり新たに付け加わったりしている
 →前期：86% 後期：86%

重点2：**教員**自己の変容が実感できる手立てを行った→前期：87.0% 後期：91.3%
児童授業を通して「わかった・できた」等満足感・達成感がある
 →前期：90% 後期：89%

3 成果と課題

重点1：ねらいに迫る対話を生むための工夫

- 毎週、授業改善セルフチェックシートを用いて自身の授業を研究の重点に沿ってふり返ることで、重点に対する意識が高まった。また、ゴールマークを用いて教師、児童共に授業の見通しを持つことで、対話の視点が明確になり、目的意識や必要感の高まりを感じられた。
- ワークシート、ホワイトボード、ICT機器等のツールを活用して児童の思考の流れを可視化することで、考えを共有し、ペア・グループ・全体で交流する視点が明確になり、ねらいに焦点化した話し合いにつなげることができた。

▲児童が考えを持つときの視点や条件をそろえる面で不十分さが見られた。児童が共通の視点で考え、主体的な対話につながるような手立てを考えていく必要がある。

重点2：わかった！できた！を実感させる手立て

- 自分の学びをワークシートに書いて可視化することで、児童が自分の学びを改めて実感し、変容の自覚につながった。
- みんなで学び合い「わかった！できた！」ことを生かして適用問題等を自力解決することで、学ぶ喜びを感じ、次の学習意欲の高まりへとつながっていた。
- ▲授業の導入、展開、終末場面で児童が自分の考えや学びを表現する場や方法が不十分だった。児童が自分の立場を明確にし、自分の考えを表現したり、終末場面で自分の学びを再確認したりするための手立てを吟味していく必要がある。

